

# キルギス共和国 独立後のクロノロジー

在キルギス日本国大使館

2025年7月

# 目次

## 1 独立以降の歴史

- 1-1 独立以降の歴史①
- 1-2 独立以降の歴史②
- 1-3 独立以降の2回の革命
- 1-4 ジェエンベコフ大統領によるアタムバエフ前大統領の追放

## 2 2020年の政変

- 2-1 2020年議会選挙後のクロノロジー(1)
- 2-2 2020年議会選挙後のクロノロジー(2)
- 2-3 2020年議会選挙後のクロノロジー(3)
- 2-4 2020年議会選挙後のクロノロジー(4)
- 2-5 2020年共和国議会選挙(結果概要)
- 2-6 2021年5月共和国憲法改正(1)
- 2-7 2021年5月共和国憲法改正(2)
- 2-8 選挙法改正及び共和国議会の権能
- 2-9 2021年共和国議会選挙(結果概要及び評価)
- 2-10 2021年共和国議会選挙(中央選管に登録された政党一覧)
- 2-11 2021年共和国議会選挙見取り図(比例代表制)
- 2-12 2021年共和国議会選挙(小選挙区制)

# 1 独立以降の歴史

# 1-1 独立以降の歴史①

## (1) アカエフ大統領時代(1991~2005年)

:自由化, 民主化を強く推進した一方、外交の多角化への模索は外国への譲歩を招いたとの批判も。

- 他の中央アジアの大統領が旧ソ連共産党指導者であった中、科学アカデミー出身という異色の出自。
- GDPが独立前の50%程度に落ち込むなど90年代を通じて経済的混乱に苦しむも、市場経済化において急進的な手法を採用。
- 2001年には米軍基地の設置を認める。2003年にはロシア軍基地も設置され、米口の軍事基地が共存。
- 2002年、中国との国境画定に関連するデモに対し治安部隊が発砲し5名が死亡(アクス事件)。内外から批判を浴びる。
- 2000~2005年にかけてのGDP成長率は3.8%\*1。



アカエフ  
初代大統領

## (2) バキエフ大統領時代(2005~2010年)

:経済の回復をみるも、前政権以上の腐敗により経済成長の機会を十分に発揮でなかったとの評価

- 強権化を強めたアカエフ政権が反政府運動で打倒され、2005年の大統領選挙で南部出身のバキエフ元首相が大統領に当選。  
(なおアカエフ大統領は北部出身)
- 工場労働者出身。州知事、首相を務めた。



バキエフ  
第2代大統領

- 体制転換直後から親族支配の拡大、強権化が進行。犯罪分子の伸長、公共料金の値上げ、野党政治家やジャーナリストに対する弾圧への国民の不満が高まる。
- フリーダムハウス指標は2009年にキルギスの評価を「部分的に自由」から「自由でない」へと下方修正\*2。
- 2007年のロシアの移民法改正が後押しし、出稼ぎが増加。2005年には12.1%であった海外送金の対GDP比が2010年には26.1%まで増加。金額ベースでは2億9770万ドルから12億5260万ドルへ増加。
- 油価上昇を背景としてロシアからの投資が増加(2005年のロシアの対キルギスFDI: 813万ドル→2010年: 9737万ドル)。2007年にGDPはソ連崩壊前の1989年の水準に回復。
- 2005~2010年にかけてのGDP成長率は5.7%。

## (3) バキエフ政権崩壊・暫定政府樹立(2010年)

:再度の政変、議会制民主主義の導入

- 4月、反政府集会が発生し、野党勢力は外交官出身のオトゥンバエヴァ社会民主党党首を議長とする暫定政府を樹立。
- 国民投票で、議会制民主主義を掲げる改正憲法案及びオトゥンバエヴァ暫定政府議長の暫定大統領就任が決定。10月の議会選挙後、12月にアタムバエフ内閣が誕生。
- 政治的混乱によって経済は一時的に低迷。2010~2011年のGDP成長率は2.7%。



オトゥンバエヴァ  
第3代大統領

\*1 90年代は経済的落ち込みが激しいことから2000年以降の数字を示す。

\*2 2012年に「部分的に自由」に回復。

## 1-2 独立以降の歴史②

### (4)アタムバエフ大統領時代～(2011～2017年)

：外資誘致を進める一方で財政は不均衡に、退陣後は汚職容疑で要人が多数逮捕される。

- 2011年10月に実施された大統領選挙で北部出身のアタムバエフ首相が当選し大統領就任。選挙による平和裏な権力移譲が初めて実施された。
- 産業関連の省庁及び民間企業でのキャリアを有する。
- 人権活動家のアスカロフ弁護士に対し米国国務省が人権擁護者賞を授与したことを受け、対米関係が悪化。2014年に米軍基地は閉鎖。
- 内政面では電子政府化を掲げ、国際機関の関心を集めた。
- 外政面では、2015年8月にユーラシア経済同盟加盟。また、4億8890万ドルの対露債務の帳消しや、露ガスプロムによるキルギスガスの1ドルでの買収・子会社化(その替わりガスプロムはキルギスガスの負債5000万ドルを肩代わり)など、ロシアの関与が強まる。
- 西側からのODAは2015年を境として減少傾向に。
- 2013年の習近平国家主席の国賓訪問を機に中国を「戦略的パートナー」と宣言。対中債務、対中輸入の増大など、中国の経済面における影響力が拡大。
- 債務の増大が深刻化。2016年には対GDP比54.5%に達し、国内法が定める対GDP比60%のリミットに近づく。
- 2011～2017年にかけてのGDP成長率は4.6%。



アタムバエフ  
第4代大統領

### (5)ジェエンベコフ大統領就任後(2017年～2020年)

：前大統領との政争、地方開発の重視

- 2017年10月15日の大統領選挙で与党社会民主党推薦する南部出身のジェエンベコフ前首相が勝利。
- 元獣医であり、農業分野でキャリアを積む。
- 内政面では地方の発展と汚職対策を重視。
- 外交面では中ロ両国を「戦略的パートナー」としてともに重視。台湾問題や香港問題について中国寄りの立場を示し、新疆ウイグル自治区でのイスラム教徒収容問題についても明確な態度を示さず。
- イサコフ前首相の汚職容疑による逮捕(2018年6月)などを経て新旧大統領間の関係は悪化。治安部隊によるアタムバエフ前大統領の自宅への突入、アタムバエフ前大統領の逮捕に至る(2019年8月)。
- ロシアに範をとったメディア規制法案については法律の必要性を指摘しつつも審議差し戻しとし、賛否いずれの立場に対しても慎重な立場を示す。(2020年6月)
- 社会民主党は分裂状態に。2020年10月の議会選挙へ向け政界は再編。  
(2020年10月議会選挙以降の動きについては、第2章御参照。)



ジェエンベコフ  
第5代大統領

## 1-3 独立以降の2回の革命

### <2005年「チューリップ革命」>

#### 【独立とアカエフ初代大統領】

1991年8月31日キルギス独立。

アカエフ初代大統領は、民主化と市場経済化を推進。

1991年、IMF加盟。

1998年、CIS諸国で初めてWTO加盟。

一族の汚職と強権的な傾向の強まりに対し、国民が反発。



写真: Azattyk通信

#### 【革命】

#### 2005年2～3月の議会選挙での不正疑惑

親政府派・中立派が議席の約9割を獲得。

野党党首のバキエフ氏は選挙結果の無効化を求め抗議活動。

建物襲撃等の革命に発展。

アカエフ政権は崩壊し、アカエフ大統領はロシアに亡命。

バキエフ氏が大統領兼首相に就任。

### <2010年「4月革命」>

#### 【バキエフ大統領への反発】

バキエフ大統領も、強権的な傾向が強まり、親族を優遇。  
公共料金の値上げで国民の反発を買う。

#### 2010年4月、野党勢力の反政府運動が政変に発展。

ビシュケク市での衝突で87人が死亡し、1500人以上が負傷。  
現在、4月7日は「4月革命記念日」でキルギスの祝日(労働日)。  
バキエフ一族はベラルーシに亡命。

#### 【暫定大統領と革命の余波】

2010年5月、野党側指導者の一人オトゥンバエヴァ氏  
が暫定大統領に就任。

同年6月、南部においてキルギス系・ウズベク系住民間で  
大規模な民族衝突が発生、470名余が死亡。



写真: kloop通信

#### 【オトゥンバエヴァ大統領就任と事態收拾】

2010年6月、憲法改正(大統領制⇒議会制)及びオトゥンバエヴァ暫定  
大統領の信任を諮る国民投票で、オトゥンバエヴァ氏が大統領に就任  
(任期は2011年末まで)。

同年10月の議会選挙において、オトゥンバエヴァ支持の政党で過半数  
議席を取ることができず、第1党のアタ・ジュルト党(党首タシエフ)、第2党  
の社会民主党(党首アタムバエフ)及び第4党の共和党からなる連立政権  
が12月に発足(アタムバエフ首相)。

## 1-4 ジェエンベコフ大統領によるアタムバエフ前大統領の追放

### 【2011年大統領選挙】

2011年10月に実施された大統領選挙で、アタムバエフ首相が当選し、同年12月1日に大統領就任。

### 【2017年大統領選挙】

ジェエンベコフ大統領候補が、アタムバエフ大統領の全面的な支持を得て当選、同年11月24日に大統領就任。

ジェエンベコフ氏は、2015年にアタムバエフ大統領がオシュ州政府代表(知事)から国家人事局長に抜擢。

アタムバエフ大統領が自分の傀儡となる後継者としたと噂された。



写真: Azattyk通信



### 【アタムバエフ前大統領の側近追放】

2018年に入り、アタムバエフ前大統領とジェエンベコフ大統領の関係は悪化し、2018年4月末までにジェエンベコフ大統領はアタムバエフ前大統領派を全員解任。

アタムバエフ前大統領最大の側近イサコフ前首相をはじめ、クルマトフ元ビシュケク市長、イブラモフ前ビシュケク市長を汚職容疑で逮捕。

### 【アタムバエフ前大統領の逮捕】

2019年6月、元大統領の不逮捕特権剥奪が議会で可決。最高検察庁はアタムバエフ前大統領の在職中の権力乱用と汚職を告発。

8月8日、内務省特殊部隊が拘束作戦で道路・通信網を遮断、3000人以上の警察官が動員された。アタムバエフ前大統領支持者との間で抗議デモと投石による被害が発生。内務省特殊部隊がアタムバエフ氏ら14人を逮捕。

# 2 2020年の政変

## 2-1 2020年議会選挙後のクロノロジー(1)

### 10月4日議会選挙実施から 10月10日ジャパロフ新首相選出まで

10月4日:

●共和国議会選挙(第7会期)が実施され、17党出馬したうちジェエンベコフ大統領派の与党3党(ビリムディク党、メケニム・キルギスタン党、キルギスタン党)と野党1党(ブトゥン・キルギスタン党)が議席を獲得。政権寄りの3党が議会定員120議席のうち107議席を獲得する結果となった。

10月5日:

●選挙結果の速報を受け、「不正な選挙が行われた」とする疑念や選挙結果に対する不満が噴出し、アラ・トー広場にてアタ・メケン党やビル・ボル党など野党支持者を中心とする市民(約6000人)が選挙のやり直しを求めて集会を行う。

10月6日:

●深夜、アラ・トー広場にて放水やゴム弾等によりデモ隊を排除しようとした警官隊とデモ隊が衝突し、その一部が暴徒化して未明に議会堂兼大統領府(ホワイトハウス)を襲撃・占拠したうえ建物の一部に放火。また国家安全保障委員会に押し入って、収監中のジャパロフ元議員、アタムバエフ元大統領、イサコフ元首相等が解放される。

●デモ隊がビシュケク市庁舎を占拠し、スラクマトフ市長が辞任。

●野党11党(ブトゥン・キルギスタン党、アタ・メケン党、共和国党、ビル・ボル党、レフォルマ党他)が、キルギスの合法的な政権移譲に向けて協力することを目的として、マドゥマロフ「ブ」党党首を議長とする「調整評議会」を創設。

●中央選挙・国民投票管理委員会が4日の選挙結果を無効とする旨発表。騒乱発生等の政治的理由ではなく、票の買収等の不正が見られたというあくまで法的事由により無効化されると発表。

●ジェエンベコフ大統領がBBCとのインタビューにて、「これは違法な権力の掌握であり、私は合法的な大統領として、国民を団結させる責任がある」と発言。

●オトゥンバエヴァ元大統領が今般の情勢を受け、「大統領は民衆に耳を傾けるべきであり、今各党の党首は共同で戦略を決定して新たな選挙の日程を国民に示すべきである」と発言。

●放火された国会議事堂に代わり「Hotel Dostuk」にて議会臨時会合が召集され、**ジャパロフ氏を新首相に推薦**。ジュマベコフ議長が辞任しアブディルダエフ氏が新議長に指名される。

(※議会は定員の過半数である61人の出席が成立条件であるところ、61人が集まらず、ジャパロフ氏の首相指名は無効であった。なお、当地法律系NGO「アディレット(正義)」は上述の2人の指名とポロノフ首相の辞任に関し、これらの手続が共和国憲法に違反しているとの声明を発出した。

10月7日:

●野党5党(レフォルマ党、オールド党、メケン・インティマギ党、チョン・カザット党、イマン・ヌル党が「**国民調整評議会**」(※「調整評議会」とは別)を結成。マミトカノフ「チ」党党首によると、ジャパロフ氏とタシエフ氏(※ジャパロフ氏の盟友でありメケンチル党党首。現・国家保安委員会議長)も当初評議会に参加するはずであったが、ジャパロフ氏が首相指名を得るため何の相談もなく臨時議会と合意したことから、国民調整評議会はジャパロフ氏を首相として認めないと発表した。

●ジェエンベコフ大統領が2回にわたって声明を発出。デモ参加者を非難し、自警活動を行った若者に感謝の意を示すとともに、野党勢力の指導者らに対し冷静な行動を呼びかけた。

●議会臨時会合が再び召集され、ジャパロフ氏の首相任命とジェエンベコフ大統領の罷免につき決議する予定であったが、定員過半数の61人が集まらなかったため開催されず。

10月9日:

●ジェエンベコフ大統領により大統領非常事態令発出。

●**ポロノフ首相が辞任し、内閣総辞職**。

●「調整評議会」がババノフ元首相を首相候補として擁立。

●夕方、アラ・トー広場でアタムバエフ派、他野党支持派の集会開催中にジャパロフ支持者が乱入して騒乱に発展。この際、アタムバエフ元大統領やイサコフ元首相の車両が銃撃を受けた他、ババノフ元首相等が襲撃される。

10月10日:

●アブディルダエフ新議長が招集した議会臨時会合にて全会一致でジャパロフ氏を新首相として承認(本会合に出席した議員は51人のみであったが、議会会合は定員総数120人の過半数である61人以上の出席がなければ会合は成立しないため、10人分の委任状を以て定員を満たしたとみなした)。しかし、カシマリエヴァ副議長(ビリムディク党より出馬)等が本決定に違法性があるとして認めない旨発表した。本会議の冒頭、アブディルダエフ議長が辞任し、議事進行はバキロフ副議長(メケニム・キルギスタン党首)に委任。

## 2-2 2020年議会選挙後のクロノロジー(2)

10月13日イサエフ議長就任から  
10月21日議会再選挙実施決定まで

10月13日:

●イサエフ議員（キルギスタン党首）が議長に就任。

10月14日:

●規定の出席数を満たした上で（83人）改めて開催された議会会合において、**ジャパロフ氏が再び新首相に選出される**。また、同日に新内閣も選出され、**ジェエンベコフ大統領はそれを承認する大統領令に署名した**。外務大臣も元駐日大使のアイダルベコフ氏からカザクバエフ氏に交代した。

10月15日:

●ジェエンベコフ大統領は午前の時点で事態が鎮静化するまで辞任要求に応じないとしていたものの、午後に一転して大統領府ウェブサイト上に**辞任の意を表す国民への呼びかけ**が掲載された。

10月16日:

●議会が招集され、ジェエンベコフ大統領に「元大統領」の称号が授与されるとともに非常事態令の解除が決定される。ジェエンベコフ大統領の辞任に伴いイサエフ議長に大統領代行権限が委譲されるはずであったが、同議長がそれを拒否したため、**ジャパロフ首相が大統領代行を兼任することとなった**。

10月21日:

●中央選挙・国民投票管理委員会が4日の選挙結果の無効化を受け、議会再選挙を12月20日に実施することを決定。

10月22日議会再選挙延期から  
11月4日マミトフ議長就任まで

10月22日:

●憲法改正が行われるまで、最長2021年6月末まで議会再選挙を延期する旨の法案が議会で可決され、前日の中央選挙・国民投票管理委員会の決定が覆された。

10月24日:

●行政裁判所が、12月20日に議会再選挙を行うことを定めた中央選挙・国民投票管理委員会の決定を無効とした。

10月28日:

●中央選挙・国民投票管理委員会が、24日の行政裁判所の決定を不服として最高裁判所に提訴。

10月29日:

●最高裁判所が前日の中央選挙・国民投票管理委員会による上告申立てを差戻したが、同委員会が再度上訴。

10月30日:

●最高裁判所は上告申立ての期限切れを理由に審査を実施せず、24日の行政裁判所の判決が確定し、12月20日の議会再選挙は行われないことに決定。

11月4日:

●イサエフ議長が辞職し大統領選挙に立候補。後任には**ジャパロフ大統領代行兼首相の盟友マミトフ氏が選出される**。

## 2-3 2020年議会選挙後のクロノロジー(3)

11月6日ババノフ元首相によるジャパロフ氏への支持表明から  
11月17日憲法改正案発表まで

11月6日:

●10月9日に襲撃されたババノフ元首相は大統領選挙に出馬せず、ジャパロフ大統領代行を支持する考えを表明。

11月11日:

●ジャパロフ大統領代行、議会選挙において各党が議席を獲得するための最低得票ラインを7%から3%に引き下げる、投票区の移動をキルギス国外居住者に限定するなどの憲法関連法改正案に署名。

11月12日:

●ジャパロフ大統領代行が就任後初の記者会見を行う。

11月14日:

●ジャパロフ大統領代行兼首相がその職務を停止し、大統領選挙に立候補。同日付深夜で候補者登録が締め切られ、最終的な候補者は63人に。

11月15日:

●マミトフ国会議長が大統領代行、ノヴィコフ第1副首相が首相代行に任命される。

11月17日:

●憲法改正の是非を問う国民投票の実施に係る署名の回収が議会で始まる。国民投票の実施には80名の賛成が必要であるところ、同日時点で80名の署名が集まったとして、同日中に憲法改正案が議会公式サイト上で発表される(大統領権限強化、議会定員削減(120名→90名)、人民クルルタイ(キルギス人の伝統的な部族集会)の創設、選挙制度改革等が主な内容)。

11月17日ヴェニス委員会による緊急文書の発出から  
12月15日大統領選挙活動の開始まで

11月17日(続き):

●EUヴェニス委員会が緊急文書を発出し、「憲法改正国民投票を実施するために議会再選挙を延期することは歓迎できず、10月28日で会期が終了しているはずの第6会期議会に、憲法改正などの重大事項に係る決定を行う権限はない」等の見解を表明。

11月22日:

●憲法改正案の内容に抗議する人々がビシュケク2駅からアラ・トー広場まで行進。主催団体である「バシュタン・バシュタ(最初から始めよ)」の発表によれば、参加者は約500名。

11月23日:

●憲法改正案と国民投票実施の正当性への疑問の声を受け、ジャパロフ氏が「国民投票の実施を遅らせても構わないが、(別の国民投票を実施して)政治体制(議会制か大統領制か)を国民に問うべきである」旨発言。

12月11日:

●国の政治体制(大統領制か議会制か)を問う国民投票実施法案が3回の読会を経て議会で可決され、マミトフ大統領代行が法案に署名して成立。1月10日に大統領選挙と同時に政治体制を問う国民投票が実施されることが決定。

12月15日:

●中央選挙・国民投票管理委員会により大統領選挙候補者審査が終了し、18名の候補者が候補者証を受領。各候補者による選挙運動開始(～2021年1月9日)。

## 2-4 2020年議会選挙後のクロノロジー(4)

2021年1月10日大統領選挙・国民投票から  
8月27日「選挙法」改正まで

2021年1月10日:

●大統領選挙及び政治体制を問う国民投票（大統領制か議会制か）の実施。  
ジャパロフ候補が大統領に選出されるとともに、国の統治体制として大統領制が採択された。

1月28日:

●ジャパロフが第6代大統領に就任。

4月11日:

●1月の国民投票の結果を受け、憲法改正案の是非を問う国民投票が実施され、承認される（主な内容：議会制から大統領制への移行、大統領権限の大幅強化、議会・内閣の権限縮小、議会とは別の審議機関「人民クルルタイ」の創設、選挙制度改革等）。

5月5日:

●ジャパロフ大統領が憲法改正案に署名し、**新憲法が公布**。これに伴い首相府が大統領府に吸収され、新設された内閣府の議長にマリポフ首相が就任。政府機関の大規模再編が実施される。

8月27日:

●5月に公布された新憲法に準ずる「選挙法」改正法にジャパロフ大統領が署名（主な内容：議会定員を120人から90人に削減、比例代表制による議員選出を比例代表制（54議席）・小選挙区制（36議席）の並立制に変更、政党が議席を獲得するための最低得票率を7%から5%に引き下げ等）。

2021年8月29日第7会期共和国議会再選挙の日程確定から  
11月28日選挙実施まで

8月29日:

●2020年10月6日に中央選挙・国民投票管理委員会が結果を無効化し、再投票が延期になっていた第7会期共和国議会選挙の日程を11月28日で確定する大統領令にジャパロフ大統領が署名。

●中央選挙・国民投票管理委員会が同選挙の公示を行い、立候補政党登録を開始。

9月3日:

●第7会期議会再選挙の立候補政党登録締切。タシエフ国家保安委員会議長が設立した「アタ・ジュルト党」、テケバエフ元共和国議会議長が党首を務める「アタ・メケン党」を含む計75党が立候補（10月18日の供託金納入締切後に立候補政党が確定）。

10月14日:

●選挙区制候補者の立候補締切

10月18日:

●比例代表制・選挙区制候補者の必要書類提出及び供託金納入締切

10月29日～11月27日:

●選挙活動期間

11月28日:

●第7会期共和国議会再選挙の実施。

## 2-5 2020年共和国議会選挙(結果概要)

※情報は2020年10月当時

- ・ 2020年10月4日 第7会期共和国議会選挙実施
- ・ 全国投票率56.2%
- ・ 与党3党及び野党1党のみが議席を獲得(議席獲得には得票率7%以上が必要)

### 結果概要

- ・ 1位:ビリムディク(連帯)党、24.5%(46議席) 親ジェエンベコフ政権
- ・ 2位:メケニム・キルギスタン(我がキルギスタン)党、23.88%(45議席) 親ジェエンベコフ政権
- ・ 3位:キルギスタン党、8.76%(16議席) 親ジェエンベコフ政権
- ・ 4位:ブトゥン・キルギスタン(統一キルギスタン)党、7.13%(13議席) 野党

その他、ジャパロフ(現大統領。当時収監中)が設立し、その盟友タシエフが率いるメケンチル(愛国者)党(6.85%)、ババノフ元首相が設立した共和国党(5.79%)など16党が参加。

### 騒乱の発生

- ・ 選挙結果(与党のみで約9割の議席を獲得)を不服とした野党勢力が不正を訴えて大規模集会開催を呼びかけ→騒乱発生により中央選挙・国民投票管理委員会が10月6日に選挙結果を無効化。
- ・ 第6会期共和国議会が継続したまま、2020年11月28日に再選挙の実施が決定された。

### 議席を獲得した4党の概要

#### ビリムディク党(46議席)

- ・ 党首:マラト・アマンクロフ
- ・ ジェエンベコフ前大統領の弟が所属、同大統領が所属する社会民主党出身者が多い



#### メケニム・キルギスタン党(45議席)

- ・ 党首:ミルラン・バキロフ
- ・ ジェエンベコフ大統領が釈放した、数々の汚職疑惑を持つマトライモフ元税関次長との関係が噂



#### キルギスタン党(16議席)

- ・ 党首:カナトベク・イサエフ
- ・ 比例名簿には現職議員が多くみられた
- ・ 中央選管への書類提出が遅れ、登録をめぐって裁判に発展



#### ブトゥン・キルギスタン党(13議席)

- ・ 党首:アダカーン・マドゥマロフ
- ・ 右派で民族国粹主義



## 2-6 2021年5月共和国憲法改正(1)

### 【新憲法の主なポイント】

- 議会制から大統領制への移行
- 大統領権限の大幅な強化と、それに伴う三権分立の不均衡
- 共和国議会・政府（内閣）の権限縮小及び裁判所の独立性縮小
- 「キルギスの伝統的文化・価値観」の重視と、それに伴う報道・表現の自由に対する制限の懸念
- 議会とは別に、「人民クルルタイ」（社会発展に関する諮問・監査機関）の創設

### 旧憲法の内容

- 政治体制：**議会制**
  - ・ 大統領は再選禁止、任期6年
- 大統領権限
  - ・ 大統領は議会に法案を提出することができず、議会から提出された法案を承認／拒否するのみ
  - ・ 政府要職の人事決定・任免、内閣改造を行うことができない
- 政府（行政）
  - ・ **首相は政府（内閣）の長**
  - ・ 行政機関及び地方自治機関の長を任命・解任
- 共和国議会（立法）
  - ・ 定員120人（全て比例代表制で選出）、候補者の年齢21歳以上
  - ・ 政府構成・人事に関する決定権を有する
  - ・ 大統領が署名しなかった法案に議長が署名し、公布することができる
  - ・ 内閣不信任決議を行うことができる

### 新憲法の内容

- 政治体制：**大統領制**
  - ・ 大統領は**国家元首であるのみならず、内閣（政府）を率いる最高官吏**
  - ・ 大統領は2期まで再選可、任期5年
- 大統領権限：**大幅強化**
  - ・ 議会に法案を提出することができる
  - ・ 政府要職の人事決定・任免、内閣構造の決定を行うことができる
  - ・ 大統領罷免手続きが煩雑化
- 政府（行政）：**行政権を大統領が掌握**
  - ・ 首相職及び首相府の廃止。大統領が閣議を主宰し、内閣に指示を出す
  - ・ 内閣府創設（これに伴いマリポフ首相が内閣議長に就任）
- 共和国議会（立法）
  - ・ 定員90人（うち54人を比例代表制、36人を小選挙区制で選出）、候補者の年齢25歳以上
  - ・ 内閣閣僚に関する大統領の決定は議会の同意を必要とする。議会の閣僚の罷免権については憲法上規定されていない
  - ・ 大統領が署名しなかった法案を公布することができない
  - ・ 内閣不信任決議を行うことができない

## 2-7 2021年5月共和国憲法改正(2)

### 【新憲法の主なポイント】

- 議会制から大統領制への移行
- 大統領権限の大幅な強化と、それに伴う三権分立の不均衡
- 共和国議会・政府（内閣）の権限縮小及び裁判所の独立性縮小
- 「キルギスの伝統的文化・価値観」の重視と、それに伴う報道・表現の自由に対する制限の懸念
- 議会とは別に、「人民クルルタイ」（社会発展に関する諮問・監査機関）の創設

### 旧憲法の内容

- 裁判所（司法）
  - ・ 最高裁判所に憲法院が附属する
  - ・ 最高裁判所の長官・副長官は、同裁判所の裁判官が選出する
  - ・ 最高裁判所の長官・副長官の任期は3年、再選禁止
- 表現・言論の自由
  - ・ 平和的集会の開催を禁止・制限してはならない
  - ・ 民族的出自・所属を表明する自由を保証されるとともに、その表明を強制されない

### 新憲法の内容

- 裁判所（司法）
  - ・ 2010年憲法改正時に廃止された独立機関としての憲法裁判所が復活し、最高裁判所と並ぶ司法機関となる
  - ・ 憲法裁判所長官及び最高裁判所長官は、大統領が、裁判官評議会の提案を基に、共和国議会の同意を得て、憲法裁判所と最高裁判所の裁判官の中から任命する。大統領は憲法裁判所長官及び最高裁判所長官の勧告に基づき、憲法裁判所及び最高裁判所の副長官を任命する
  - ・ 憲法裁判所及び最高裁判所の長官・副長官の任期は5年
  - ・ 憲法裁判所及び最高裁判所の裁判官は、大統領の勧告に基づき共和国議会が選出
- 表現・言論の自由：**政権による恣意的解釈・制限強化のおそれ**
  - ・ 「道徳的・倫理的価値観、国民の公共的良心に反する活動」が禁止（それらが具体的に何であるのかは規定されていない）
  - ・ 平和的集会への制限禁止、民族的所属の表明に関する条項が削除
- 人民クルルタイ：共和国議会との役割分担が不明瞭
  - ・ 共和国議会とは別に、各地方から選出された代表者による審議機関「人民クルルタイ」を創設
  - ・ 「人民クルルタイ」は、大統領に対して政府要職の罷免を提案できるほか、法律案の提出ができる

## 2-8 選挙法改正と改正後の共和国議会の権能

### 選挙法改正の経緯

- 2020年11月、ジャパロフ大統領代行（当時）が同年10月の議会選挙における不正の横行を受け、投票区変更届の原則禁止や最低得票ラインの引下げを規定した「キルギス共和国大統領及び共和国議会議員の選挙に関する憲法法律」（以下、選挙法）改正法案に署名。
- 2021年5月、憲法改正に関する国民投票（4月）の結果を受け、議員定数削減、候補者年齢の引上げ等が規定された新憲法が成立。
- 2021年7月、新憲法に沿った選挙法改正法案が可決され（議会定員120名のうち賛成107／反対2）、8月27日にジャパロフ大統領が署名。

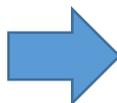
### 選挙法改正前（2020年10月以前）

#### ● 議員定数及び議員資格

- ・ 議員定数：120名
- ・ 年齢制限：21歳以上
- ・ 学歴：規定なし
- ・ 議会に占める女性の割合：30%

#### ● 選挙方式及び選挙運動

- ・ 選挙方式：比例代表制（120名選出）のみ
- ・ 投票日の6か月以内に設立された政党は立候補することができない
- ・ 議席獲得のための最低得票率：全体で7%及びビシュケク市・オシュ市を含む各州で0.7%
- ・ 有権者は「投票区変更届（Form 2）」の提出により投票区を移動できる  
（※本制度は有権者が住民登録と異なる場所で投票を行う権利を保障する趣旨であったが、2020年10月議会選挙では、政党が特定の州で上記最低得票率をクリアできない等の理由から組織的に有権者を買収し、恣意的に投票区を移動させたことが問題となった。OSCEの報告によれば、総有権者約350万人のうち約44万人が投票区を移動したとされる）



### 選挙法改正後

#### ● 議員定数及び議員資格

- ・ 議員定数：90名
- ・ 年齢制限：25歳以上
- ・ 学歴：高等教育を受けていなければならない
- ・ 議会に占める女性の割合：比例代表で選出される議員のうち少なくとも30%

#### ● 選挙方式及び選挙運動

- ・ 選挙方式：比例代表制（54名選出）及び小選挙区制（36名選出）の並立制
- ・ 新規に設立された政党も立候補可能
- ・ 議席獲得のための最低得票率（比例代表制のみ）：全体で5%及びビシュケク市・オシュ市を含む各州で0.5%（2020年11月改正時点では3%及び0.3%と規定）
- ・ 投票区移動の原則禁止

### 共和国議会の権能

#### ● 1院制、任期5年

#### ● 最高の代表機関であり、その権限の範囲内で立法権及び監督機能を行使する。

- 2021年5月の憲法改正により、国民投票実施の決定・内閣不信任案の決議・大統領の署名を受けなかった法案に対する議長の署名・公布権の権限を喪失するなど、議会権限が縮小した。また、内閣閣僚に関する大統領の決定は議会の同意を必要とするが、議会の閣僚の罷免権については憲法上規定されていない。

## 2-9 2021年共和国議会選挙(結果概要及び評価)

- ・ 2021年11月28日 第7会期共和国議会再選挙実施 (2020年10月4日に実施された同議会選挙の再投票)
- ・ 全国投票率34.61%
- ・ 2021年7月に実施された「選挙法」改正後初の議会選挙。90議席のうち54議席が比例代表制、36議席が小選挙区制で選出。比例代表制での議席獲得には、全国で5%以上及び各州(ビシュケク市及びオシュ市含む)で0.5%の得票率が必要

### 結果概要

【比例代表制】(赤字:現政権寄り、青字:野党)

出馬した21政党のうち、現政権寄りの3政党及び野党3政党が議席を獲得。

- ・ 1位:「**アタ・ジュルト(祖国)＝キルギスタン**」党、17.32%(15議席)
- ・ 2位:「**イシェニム(信用)**」党、13.61%(12議席)
- ・ 3位:「**インティマク(調和)**」党、11.0%(9議席)
- ・ 4位:「**アリヤンス(連盟)**」党、8.35%(7議席)
- ・ 5位:「**プトゥン(統一)・キルギスタン**」党、7.04%(6議席)
- ・ 6位:「**イマン・ヌル(信仰の光)**」党、6.17%(5議席)

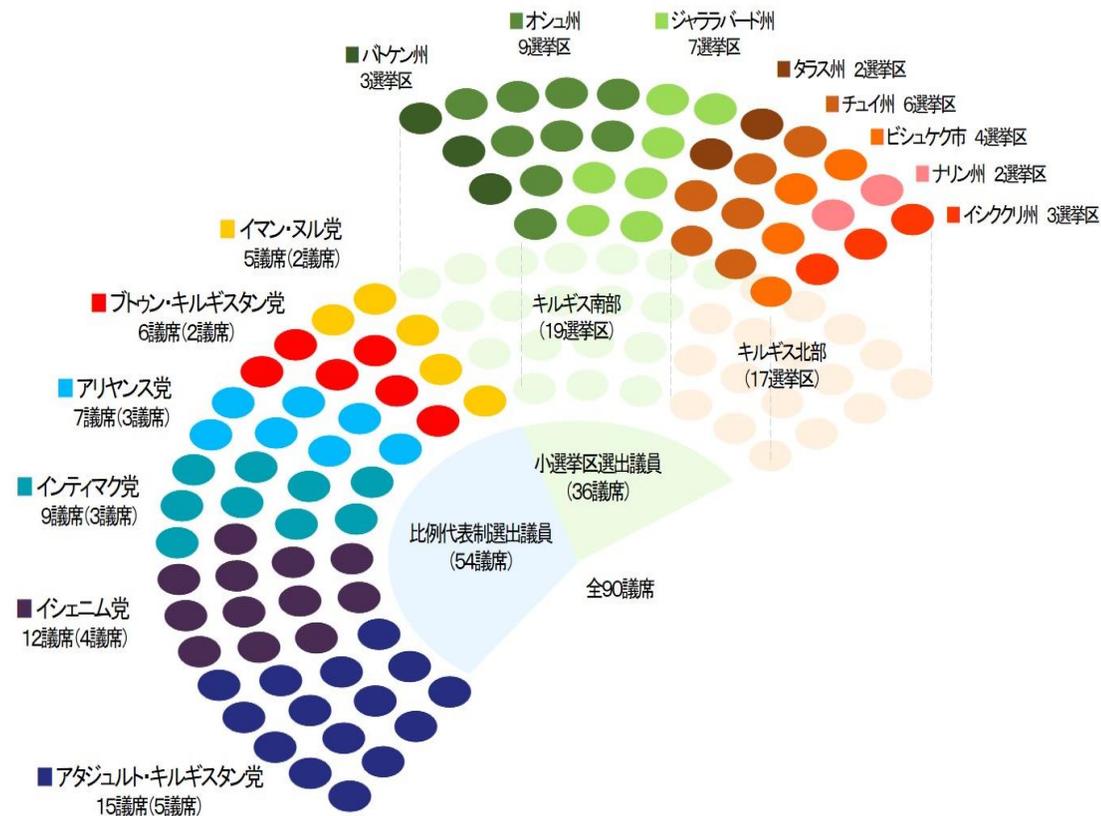
【小選挙区制】

選挙区に地盤を有する現職議会議員、地方議員、ビジネスマンを中心に当選

### 本選挙の評価

- ・ ジャパロフ政権は行政資源濫用及び票買収の撲滅を掲げ、厳しい取締りを展開した結果、部分的な選挙違反は見られたものの、「史上最も公正な選挙」と評される結果となった。
- ・ 2020年10月の議会選挙後の騒乱の中から成立したジャパロフ政権は、一連の政治改革(2021年1月大統領選挙、5月憲法改正、11月議会選挙)を経て、その正統性や法的基盤を確立した。

### 議席配分 (※比例括弧内は女性議員数)



## 2-10 2021年共和国議会選挙(中央選管に登録された政党一覧)

### 現政権寄り (5政党)

- アタ・ジュルト(祖国) = キルギスタン党
  - イシェニム(信用)党
  - インティマク(調和)党
- 以上3政党が議席を獲得

- エル・ウムトゥ(国民の期待)党
- メケンチル・エル(愛国者国民)党



### 野党 (16政党)

- アリヤンス(連盟)党
  - ブトゥン(統一)・キルギスタン党
  - イマン・ヌル(信仰の光)党
- 以上3政党が議席を獲得

- アザティック(自由)党
- アタ・メケン(祖国)党
- 社会民主主義者党
- ウルツタル・ビリムディギ(国民の統一)党
- バギド(方向性)党
- キルギス統一党
- ウール・ジュルト(偉大な国民)党
- クチュー・レギオン(強い国民)党
- レガライズ(法典化)党
- オルド(中道)党
- 国民の遺産「アルザド」党
- ジャシャシン(生きる)・キルギスタン党
- 緑のキルギスタン党

野党

政党資金が多い

現政権寄り

政党資金が少ない



**ブトゥン(統一)・キルギスタン党**

- ・ 拠出金額6位
- ・ 民族主義の右派、出稼ぎ移民を中心に強固な支持層



**アタ・メケン(祖国)党**

- ・ 拠出金額8位
- ・ 創設者のテケバエフは北部に基盤を持つ古参の政治家



**社会民主主義者党**

- ・ 拠出金額9位
- ・ アタムバエフ元大統領の息子が所属



**ウルツタル・ビリムディ(国民の統一)党**

- ・ 拠出金額10位
- ・ 選挙直前に設立された新政党、オシュ州に基盤



**イマン・ヌル(信仰の光)党**

- ・ 拠出金額11位
- ・ 政治色が薄く宗教色・道徳色の強い政党



**アリヤンス(連帯)党**

- ・ 拠出金額3位
- ・ 西側諸国との関係強化を重視するリベラル派
- ・ カザクバエフ外相が所属する「共和国党」やジェエンベコフ前大統領時代の与党「ビル・ボル党」等が合流して結成



**アザティック(自由)党**

- ・ 拠出金額7位
- ・ 党首はジェエンベコフ前大統領派の政党出身である一方、ジャパロフ大統領の友人も所属



**インティマク(調和)党**

- ・ 拠出金額4位
- ・ ママタリエフ党首をはじめ、ジェエンベコフ前大統領時代の与党から転向した党員が多い



**イシェニム(信用)党**

- ・ 拠出金額2位
- ・ 現政権支持を表明、ジャパロフ政権の政策と党のマニフェストに共通点が多い
- ・ 大統領顧問などが所属



**エル・ウムトゥ(国民の期待)党**

- ・ 拠出金額5位
- ・ ジャパロフ大統領夫人及び息子の支援を受けているとの由
- ・ 若手候補者が多い



**メケンチル・エル(愛国者・国民)党**

- ・ 拠出金額12位
- ・ 「アタ・ジュルト党」を母体とし、「大統領の強大な権力」を支持



**アタ・ジュルト(祖国)＝キルギスタン党**

- ・ 拠出金額1位
- ・ ジャパロフ大統領が設立した「メケンチル党」及びその盟友タシエフ国家保安委員長の「アタ・ジュルト党」の出身者多数
- ・ 南部に強固な支持基盤

※各政党の円の大きさは、中央選挙・国民投票管理委員会に申告した政党拠出金の大きさを示す  
 ※出馬した21政党のうち上位12政党のみ掲載

# 2-12 2021年共和国議会選挙(小選挙区制)

現政権寄りの結果

野党寄りの結果

- ・ 共和国議会定員90人のうち、36人が小選挙区制で選出
- ・ 各選挙区に地盤を有する現職・元共和国議会議員、地方議員、ビジネスマンを中心に当選

## 【チュイ州(6議席)】

- ・ 2020年議会選挙において、ジェエンベコフ前大統領派「ビリムディク(連帯)」党から出馬したヌルランベク・アゼイガリエフ、
- ・ アタムバエフ元大統領の長男セイドベク・アタムバエフらが当選

## 【タラス州(2議席)】

- ・ ダスタンベク・ジュマベコフ(アタムバエフ・ジェエンベコフ政権下で共和国議会議長)及び
- ・ バクティベク・チョイベコフ(元「ビリムディク」党所属)が当選

## 【ジャララバード州(7議席、タシエフ国家保安委員長出身)】

- ・ タシエフ委員長の弟シャイルベク・タシエフ、
- ・ 共和国議会にて国際問題・安全保障・防衛委員会委員長を務めるタザベク・イクラムフ、
- ・ ジャパロフ政権下でマナス空港長官を務めたバクティベク・シディコフ、
- ・ バキエフ元大統領の報道官を務めたヌルランベク・シャキエフらが当選

## 【バトケン州(3議席)】

- ・ マトライモフ元税関次長の後任であり、2021年に汚職容疑で有罪判決を受けたヌルラン・ラジャバリエフらが当選

## 【ビシュケク市(4議席)】

- ・ 「ご意見番」として反体制派に人気が高いダスタン・ベケシェフ議員らが当選
- ・ 2つの選挙区では「誰にも投票しない」の得票数が最多であり、2022年2月27日に再選挙を実施

## 【イシク-クリ州(3議席、ジャパロフ大統領出身)】

- ・ ジャパロフ大統領の姻族アキルベク・トゥモンバエフらが当選

## 【ナリン州(2議席)】

- ・ ミルラン・サミコジョ(国営テレビ局「KTRK」元会長代行)及び
- ・ ウラン・バカソフ(元「ビリムディク」党所属)が当選

## 【オシュ州(9議席)】

- ・ バキエフ政権下で検事総長を務めたエルムルザ・サティバルディエフが73%以上の得票率を獲得、憲法制定会議委員として現行憲法の制定に携わったウラン・プリモフらが当選する一方で、ジェエンベコフ前大統領派「ビリムディク」党、「メケニム・キルギスタン」党及び「キルギスタン」党出身者が多数当選
- ・ 数々の汚職疑惑に携わり、ジェエンベコフ前大統領との繋がりが噂されたマトライモフ元税関次長の兄であるイスケンデル・マトライモフも当選

